TITLE:

セルフと記憶 : Self-reference効果を中心に

AUTHOR(S):

遠藤, 由美

CITATION:

遠藤, 由美. セルフと記憶 : Self-reference効果を中心に. 京都大学教育学部紀要 1988, 34: 187-199

ISSUE DATE:

1988-03-31

URL:

http://hdl.handle.net/2433/282659

RIGHT:

京都大学学術情報リポジトリ
KURENAI 紅
Kyoto University Research Information Repository

セルフ(注)と記憶
——Self-reference 効果を中心に——

遠　藤　由　美

Self and Memory
——Some Issues of the Self-reference Effect——

ENDO Yumi

はじめに

セルフと記憶との重要なかかわりに最初に気づいたのは記憶研究の祖とも言われる H.Ebbinghaus (1884) であろう。彼は，個人の様々な感情や動機，関心などの生体の内的要因が記憶に影響することを知っていたが，彼の研究目的は“純粋な”記憶現象の解明に置かれており，そのような“厄介な”要因はむしろ排除しようとして，無意味綴りを用いるようになったのである。以後永らく，記憶研究者たちは，パーソナリティに絡む要因は極力避けようとする彼の研究方針を踏襲することになった。Ebbinghaus とは逆に，セルフと記憶の問題を積極的に取り上げたのは G.Freud (1900, 1901) であった。彼は，忘却を「記憶痕跡の衰退」ではなく，個人の動機葛藤の点から説明しようとした。彼の抑圧 (repression) 理論は，散発的にいく人かの研究者によって引き継がれたが，概念的なあいまいさと方法的未熟さゆえに，いずれも成果は芳しいものではなかった（抑圧研究のレヴェーは Holmes, 1974 を参照されたい)。

こうして，しばらく休眠状態にあったセルフと記憶に対する関心が再び活発になるのは1970年代も後半にはいってからであった。その背景には，ひとつには，セルフに対する認知的アプローチがあった。Kelly (1955) や Sarbin (1968), Epstein (1973) らは，セルフを，個人の心理的機能を組織立て，修正し，統合する上で中枢的役割をはたすものとして捉えた。そして，従来の自己研究が「認識の対象としてのセルフ」だけを問題としたのに対し，そこから一歩進んで，外界や自己についての認識判断の過程にも関心をよせるようになった (Rogers, 1974)。他方，記憶研究の領域では，記銘材料として無意味綴りだけでなく，比較的単純で明確な事物に関する単語や文をすでに用いるようになっていたが，現実世界についての記憶を直接扱って来なかったという反省 (e.g. Neisser, 1978) から，さらに人についてのより社会的な情報の記憶も研究しようという機運が高まって来た。

こうしたセルフへの認知的アプローチと ecological validity を考慮し始めた記憶研究が出会うことによって，セルフと記憶の関係は初めて本格的に実験的に検討されることになったのである。なかでも，Rogers, Kuiper & Kirker (1977) が見い出した，セルフとの関連で処理された情報は他の処理を受けた情報よりもその保持が優れる，という現象は，我々人間は自分自身に関連する事柄をことの他よくおぼえているという現実的日常的事実と類似している上に，外界の情

報を主体的に処理して行く上でセルフが果たす積極的役割を実験心理学の領域で検証する可能性を開いたものとして，多くの注目を浴びることとなったのである。

Self-reference 効果

Rogers, Kuiper & Kirker (1977) は，Craik ら (Craik and Lockhart, 1972 ; Craik and Tulving, 1975)によって用いられた処理水準説検証のための偶発学習パラダイムを応用し，セルフと関連させることが記憶を促進する有効な方略となりうることを見い出した。彼らは刺激として人格を表わす特性形容詞を用意し，個々の特性形容詞について，従来通り，その形態について判断する（形態処理）条件，その音韻について判断する（音韻処理）条件，その意味について判断する（意味処理）条件のほか，あらたに，その特性が自分に当てはまるか否かを判断する課題(self-reference条件）を被験者に課し，これら4条件における偶発記憶の成績を比較した。その結果，自己について判断した語の再生率が格段に高く，以下意味処理，音韻処理，形態処理の順であった（Table 1)。この結果は，従来の処理水準説を支持するものであると同時に，意味処理以上に強い記憶痕跡を産み出す処理があることを示唆した。ただ，この研究においては，このようなself-reference条件の記憶成績での優位性が生じるためには，セルフの関与が必要であったのか，あるいは単にパーソナリティ判断することで充分なのかは明確でなかった。そこで，Kuiper and Rogers (1979) はこの点について検討するために，やはり特性形容詞を用いて，self-referenceとは異なったパーソナリティ判断条件，すなわち特定の他者について当てはまるか否かを判断する (other-reference) 条件を設け，比較検討している。その結果，other-reference 条件は，意味処理条件より再生成績が良かったが，self-reference 条件には及ばなかった（Table 2)。

Table 1 各処理条件における平均再生率 (Rogers 他，1977)

Rating task	Cue question	Definition	Mean adjusted recall		
			Yes rating	*No* rating	*M*
Structural	Long?	Rate whether you feel the word is long or short.	.21	.18	.20
Phonemic	Rhythmic?	Rate whether you feel the word has a rhythmic or lyrical sound.	.20	.18	.20
Semantic	Meaningful?	Rate whether you feel the word is meaningful to you.	.23	.15	.19
Self-reference	Describes you?	Indicate whether the word describes you.	.33	.31	.32
M			.24	.21	.23

Table 2 各処理条件における平均再生率 (Kuiper & Rogers, 1979)

Measure	Rating task				
	Structural	Semantic	Other-referent	Self-referent	*M*
Mean proportion correct recall					
Yes rating	.09	.20	.26	.35	.23
No rating	.07	.12	.25	.30	.19
M	.08	.16	.26	.33	

このように，セルフについて判断した場合には，意味について判断した場合に比べて，あるいは他者について判断した場合に比べて，その判断語の記憶成績が良いことをいずれも，self-reference 効果という。Self-reference 効果はたちまち記憶研究者，認知的セルフの研究者双方の関心をひきつけ，数多くの研究によって再確認されている（Bellezza, 1984; Friedman & Pullybank, 1982; Ganellen & Carver, 1985; Halpin, Puff, Mason, & Martson, 1984; Katz, 1987; Keenan & Baillet, 1980; Kendzierski, 1980; Kuiper & Rogers, 1979; Lord, 1980; Maki & McCaul, 1985; McCaul & Maki, 1984; Rogers et al., 1977)。

Self-reference 効果は我が国においてもまた，いくつかの報告がある（遠藤，1985；池上，1985；加藤，1985；吉川，1984)。

このように，self-reference 効果は極めて広範囲にわたって認められている現象であるが，そのメカニズムについてはまだ解明されておらず，研究者によって意見の別れるところである。本稿では，self-reference 効果に関するこれまでの研究を紹介し，それらの問題点と今後の課題について検討する。

Self-reference 効果のメカニズム

(1) 処理水準による説明

一般に処理水準説では，刺激語の音韻や形態といった表層的特徴について判断する場合に比べて，反意語同意語判断や枠組み文に適切か否かの判断など語の意味に係わる判断をするほうがより深い処理を必要とする，という前提に立ち，この処理の深さ（depth of processing）で記憶保持の違いを説明しようとする（e. g. Craik & Tulving, 1975)。すなわち，処理が深いほど保持が良い，という主張である。Rogers らは当初の研究（1977）ではこの立場をとり，self-reference 判断は意味判断よりさらに深い処理を促し，したがって記憶保持が良かったと考えた。

しかし，丁度この頃記憶研究領域で提出された処理水準説に対する批判（e.g. Baddeley, 1978; 詳細な文献レヴューは，高橋，1983を参照されたい）に加えて，セルフに係わる処理がなぜ意味処理より“深い”のかというself-reference効果の根幹の問題に答えられないため，処理水準説は Rogers らによっても間もなく採用されなくなってしまった。

(2) 精緻化による説明

一般に，精緻化は，既存の知識と関連づけて符号化すること（e. g. Bellezza, Cheesman, & Reddy, 1977）であり，そのことによって検索ルートの数が増し，再生成績を向上させると考えられている。Self-reference 効果をこのような精緻化によって説明する立場もある。すなわち，自己については知識量が多く，記銘語に対して付加される情報量が多いために，記憶成績が良くなる（Bower, & Gilligan, 1979; Keenan & Baillet, 1980)，というのである。

Keenan & Baillet (1980) は，他者についての知識量はその人物についての熟知度に応じて異なっている，そしてセルフはその極にある最も熟知した人物であると考え，熟知度の異なる様々な他者と自分自身を対象として，パーソナリティ判断させる実験をおこなった。再認率についての結果は，Fig. 1 が示すように，対象人物の熟知性が高いほど，再認成績が良くなっており，精緻化説を支持するものとなっている。

この立場をとる研究者は，セルフを特別な認知構造であるとは考えず，HAM モデル（Ander-

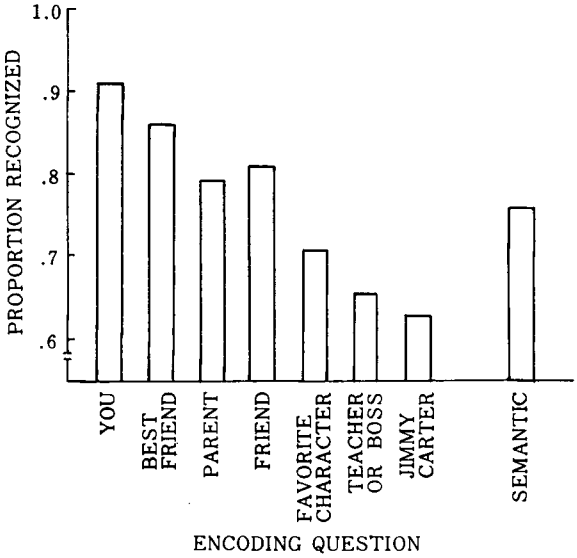

Fig. 1 対象についての熟知度が再認率に及ぼす効果
(Keean & Baillet, 1980)

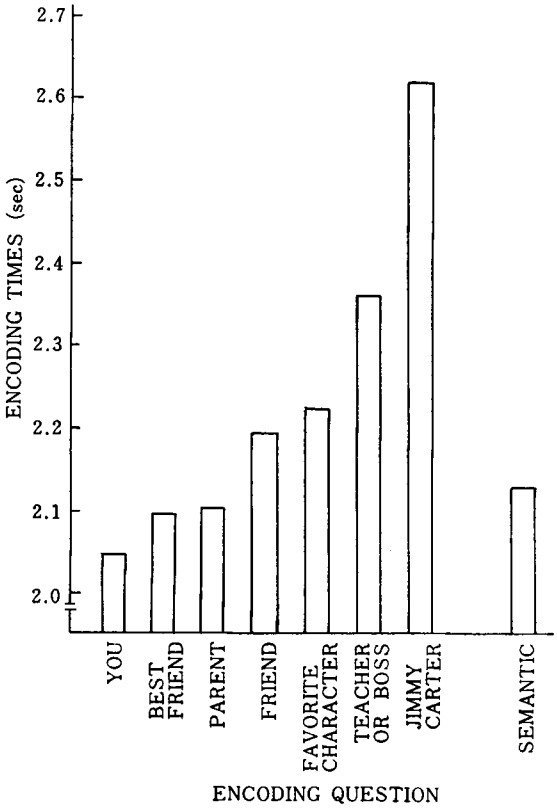

Fig. 2 対象についての熟知度が判断時間に及ぼす効果
(Keenan & Baillet, 1980)

son & Bower, 1973）のような通常の概念ネットワークの枠組みで捉らえようとする。しかし，Keenan and Baillet（1980）の判断潜時（刺激語が提示されてから，YES-NO 判断をするまでの時間）の結果は，人物についての熟知度が高く，知識量が多いほど判断が速くなることを示している（Fig. 2）。これは，知識が増えれば増える程，ネットワークの中の情報を探索するのに時間がかかる，という“fanning 効果”とは矛盾するものであり，セルフを単純なネットワークで捉らえた上で，self-refernce 効果を精緻化から説明するのは困難であるといえよう。

(3) 体制化（項目間処理）による説明

体制化は，意味的なレベルで一緒にまとまる語をグループ分けする過程（Mandler, 1977）と定義される。体制化では，精緻化とは異なって，1．刺激リスト内の語同士の関係が符号化され，それによって記憶内に連合パスを形成し，検索時に利用される（Srull, 1983; Srull, & Brand, 1983），2．カテゴリーメンバーとカテゴリーラベルとの連合が符号化され，メンバーの再生時にカテゴリーラベルが手がかりとして機能する（Bower, Clark, Lesgold, & Winzenz, 1969），ことによって記憶を促進する。

Klein and Kihlstrom（1986）は，self-reference 効果もこの体制化によって説明できると考えた。すなわち，典型的な self-reference 効果の実験では，音韻処理，形態処理，意味処理の各条件とも，刺激語ごとに方向付け質問が変る（例：刺激語「明朗」，方向付け質問「快活と同義語ですか？」）のに対して，self-reference 条件では，「あなたにあてはまりますか？」と質問が一定であるため，刺激リスト内の語同士の関係の符号化が促進され，“あてはまるもの”と“あてはまらないもの”という二つのカテゴリーが形成され，このことが self-reference 条件での記憶の高成績を生み出す。このような推察が正しいなら，意味について判断する場合でも，体制化レベルを self-reference 条件と同水準にまで引き上げれば，あるいは逆に self-reference 条件でもリスト内の項目間処理を抑制するようにすれば，意味処理条件と self-reference 条件での記憶成績に差はなくなるはずである。彼らは，イディオムとして用いられた場合は性格特性的意味を持つような身体各部あらゆる語（例「手」；「手を差し伸べる」（援助する））を刺激として選択し，self-reference，意味処理の各方向付け課題に体制化，非体制化条件をクロスさせて4条件をもうけ（Table 3参照），記憶成績を比較検討した。その結果，self-reference か意味処理かにかかわらず，体制化条件は非体制化条件より再生成績が良く（Table 4），self-reference と意味処理との記憶成績の差異は，それぞれの課題によって促される体制化の水準の違いによることが示唆された。

Table 3 Klein & Kihlstrom (1986) が用いた条件と刺激例 (Klein & Kihlstrom, 1986)

Condition	Orienting question	Target word
Semantic/unorganized	Does this word fit in the sentence?	
	“The young woman had very fair——”	Skin
Self/unorganized	Does this describe you?	
	“I would stick my——out for a friend”	Neck
Semantic/organized	Is this an external body part?	Heart
Self/organized	Can you think of an incident in which you had an injury or an illness associated with your?	Leg

Table 4 体制化水準と符号化課題が再生率に及ぼす効果 (Klein & Kihlstrom, 1986)

Encoding task	Level of organization: Unorganized	Organized	*M*
	Recall		
Semantic	.49	.79	.64
Self	.51	.78	.64
M	.50	.78	

しかし，体制化説に対して，次のような問題点を指摘できよう。すなわち，1．提示された記銘語間の関係処理による説明では，後述するように，学習時に提示されなかった語でも，セルフに関連するものであれば誤って再認されやすい（Rogers, Rogers, & Kuiper, 1979）という虚再認効果を説明できない，2．体制化説ではクラスタリング量を項目間処理量の指標としているが，クラスタリング量と再生量とは必ずしも一致しない（この点についての詳細は，豊田，1987を参照されたい）。

(4) 感情による説明

次は，感情説である。Self-reference効果の研究手法では自己についてのパーソナリティ判断や，過去のエピソード想起を求めるのが常套であるが，これらの課題は「カナリヤは鳥である」といったような一般的事実を扱う課題とは異なって，多分に感情的色彩を帯びている。刺激を感情と結びつけると後の再生に促進が生じる（Bower and Karlin, 1974；Strand and Mueller, 1977；詳細の議論は Isen, 1984 を参照されたい）ことから，self-reference 効果はこの感情要因によって生じる可能性も考えられる。前述した Keenan and Baillet (1980) の研究では，対象人物の熟知性が高まるにつれ，再認成績も良かったが，しかし，現実生活において，対象人物をよく知っているということと，その人物に対して好意をもってつきあっているということはしばしば表裏の関係にあり，この結果を感情要因から説明することも可能である。この点を明確にするため，Keenan and Baillet (1980) は第二実験でパーソナリティ判断をする条件と事実判断をする条件（例：あなたにはエラがありますか？－no，あなたには足がありますか？－yes）とを設け，再認成績を比較した。その結果，self-reference効果はパーソナリティ判断条件だけで見られた。つまり，セルフに関連した処理が記憶保持を促進するのは，それが評価感情を喚起するからであって，セルフに関連した処理であっても，単なる事実判断の場合には，記憶促進は起こらない。彼らは，「記憶の背後にある最も重要な次元は，何を知っているか，あるいはどれだけ知っているかでなく，むしろ知っていることについてどう感じているか」であると述べ，評価的判断によって喚起される感情の重要性を示唆している。

Ferguson, Rule, & Carlson (1983) は，さらに別な検討を加えている。彼らは，パーソナリティ判断の最も基本的な次元は望ましさ（desirability）であり，この評価的側面が self-reference 効果のキーポイントであるとして，特性語を材料に，好意度の異なる人物（好きな人，嫌いな人，好きでも嫌いでもない人，それに自分自身）について性格特性が当てはまるか否かを判断する群と，語の特性（意味，熟知度，イメージ喚起容易性，社会的望ましさ）についてYES-NO判断をする群で記憶成績を比較した。その結果，人物判断ではやはり self-reference 条件の記憶成績が最も良かったが，語の判断では社会的望ましさ判断条件が最も良く，両条件での再生成績は同じ程度であった（Table 5）。彼らは，この結果は self-reference でも望ましさ判断でも価値評価を伴う処理を必要とする場合には記憶成績が良いことを意味し，感情説を支持するもの，と解釈している。

しかし，Ferguson らと異なって，望ましさ判断条件と self-reference 条件の再生成績を比較すると，後者のほうが良い（Kirker and Rogers, 1978; McCaul and Maki, 1984），という結果も報告されている。また，感情説に立てば，ある特性が自分にあてはまるか否かを判断する時に喚起される感情の強さが強いものほど記憶保持が良く，両者の間には正の相関がある，と予測されるが，実際には self-reference 判断した語の再生成績と，語の感情価（その特性が自分にあてはまると考えた時，どのような感情が生起するか）や重要性（自分にとってその特性次元はどれほど重要か），示差性（その特性次元において自分は他者とどれだけ異なっているか）についての自己評定値との間にはいずれも相関がなかった（Ganellen and Carver, 1985）。これらの事実は，self-reference 判断の心的過程を評価判断の心的過程と全く同一と考えることはできないことを示唆している。

Table 5　各処理条件における平均再生率（Ferguson 他，1983）

Referent	Valence: Positive	Valence: Negative	Total
Word			
Desirability	.33c	.25cde	.29b
Familiarity	.15ab	.18abc	.17a
Imageability	.23bcd	.20abc	.21a
Meaning	.16ab	.17abc	.16a
Person			
Disliked	.19abc	.21abc	.20a
Neutral	.19abc	.13a	.16a
Self	.30de	.26cde	.28b
Well-liked	.17abc	.23bcd	.20a

Note. Cells sharing common subscripts do not differ signifcantly by Duncan's multiple-range test ($p < .05$).

感情はセルフにかかわる現象を考える際に重要な視点である。特に，情報処理的アプローチの枠組みでは見過ごしがちな要因であり，それだけにこれらの研究は感情要因について積極的に検討している点で意義がある。

しかし，他方，感情説にはまだ問題点も多い。第一には，いずれの研究もself-reference判断そのものに（もし，ふくまれるとするならば）ふくまれる感情を直接に検討していないことである。実は，この問題は，感情という概念のあいまいさ，定義困難さに関連している。より一般的には，self-reference にふくまれる感情（affect）とは emotion か，evaluation か，feeling か，mood かといった質の議論がなされていない。また，問題を限定してみても，self-refernce にふくまれる感情とはセルフに直接向けられた感情なのか，あるいは個々の特性やエピソードに対して抱いている感情なのか，後者の総和を前者と考えてよいのか，情報処理のどの段階で感情がどのように作用するかなど多くの疑問は解決されておらず，今後の検討が必要である。

(5)　スキーマ，プロトタイプによる説明

Self-reference 効果を説明するものとして，現在最も広く受け入れられているのは，セルフを独特の特徴を持つ既存の認知構造とみなすスキーマないしプロトタイプ説である。この立場に従えば，過去経験から生み出された自己についての知識は豊富で構造化されたひとつの独立した認知構造をなしている。Self-reference 効果の実験で self-reference 判断をする時にはこの構造化された認知構造であるセルフが活性化され，記銘語はそれとの関連で処理され，豊かな符号化がなされるため，記憶痕跡が強められる。

記銘語の豊かな符号化によって記憶成績が高くなることを説明する点で，スキーマ説は精緻化説と類似している。異なっているのは，精緻化説がセルフを HAM モデルのような通常の意味ネットワークの枠組みで考えるのに対し，スキーマ説ではセルフを最も豊かで統合度の高いユニ

ークな認知構造だと考える点である。

高度に組織化された認知構造は，新たな情報の処理基準として用いられる（Posner and Keele, 1968; Cantor, and Mischel, 1977）ことが知られている。Rogers, Rogers, and Kuiper (1979) は，特性語を刺激として，self-reference 判断をおこなわせ，その後再認テストを実施した。実は，その三ケ月程前，記銘語とディストラクター語のすべてに対して，自分にあてはまる程度を自己評定させてあった。この評定値に基づいて，特性語を4段階に分類し再認成績を比較したところ，記銘語では self-reference の程度に応じた違いはなかったが，ディストラクター語では self-reference の程度が高いもの程，虚再認率が高くなる傾向があった（Table 6）。この結果は，記銘語の処理段階で，基準概念としてのセルフと関連づける処理がおこなわれるので，再認段階でも概念推進型の処理が生じ，セルフに関連する語に対して虚再認が起こりやすかった，と考えられた。そして，セルフが基準概念となりうるような構造化の程度が高い豊潤な認知構造，すなわちスキーマであることを裏付けるひとつの証拠とされている。

Table 6　自己関連度が再認率に及ぼす効果（Rogers 他，1979）

		Degree of Self-Reference				
		Low	Low-Middle	High-Middle	High	M
	OLD	.76	.79	.80	.76	.78
Item Type	NEW	.79	.76	.70	.72	.74
	M	.78	.78	.75	.74	

この他，セルフに関する判断は他の判断より速い（Keenan and Baillet, 1980; Kuiper and Rogers, 1979）ことや，セルフにあてはまる度合いが高いものほど，その判断が速い（Markus, 1977; Kuiper, 1981）こと，セルフにあてはまらない語より，あてはまる語の記憶が良い（Kuiper and Rogers, 1979; Markus, 1977; Markus, Crane, Berstein, and Siladi, 1982）ことなども，スキーマ説を支持している。

しかし，一般にスキーマに対しては，説明概念にすぎないといった批判が出されているし（川崎，1985），その形成過程や活性化過程など明らかにされていないことも多い。

これまで，self-reference 効果のメカニズムについて五つの説を紹介してきたが，上述したように，どの説にもそれぞれ問題点やあいまいな点があり，論争はまだ続いている。しかし，これらの研究は，セルフとの記憶のかかわりについて，従来の臨床的観察だけでは明らかにできなかった側面を客観的に検討することの可能性を具体的に示した点で意義がある。

Self-reference 効果研究の問題点

次に，より大きな視点から，self-reference効果についての研究の問題点について述べてみたい。

これら self-reference 効果についての研究のほとんどが，自分自身に関連づけられた情報は素早く処理され，しかも記憶保持が良いという，いわば効率性を産み出すメカニズムをめぐっての批判，反批判論争であった。そして，効率性に関連する個々の現象については，処理水準や体制化説で説明が可能であった。確かに，記銘項目を体制化しないより，するほうが記憶成績はよいだろう。

しかし，セルフがいかに記憶にかかわっているか，セルフに関連する情報はどう記憶されるのか，といった問題を研究していく上では，個々の現象に対する説明は必ずしも有効ではない。セルフと記憶のかかわりの問題については，セルフに係わる情報の記憶保持が良いという効率性のほかにも様々な現象がある。

たとえば，セルフに関する記憶の選択性を取り上げた現象が過去にいくつか指摘されている。そのひとつは Greenwald ら（Greenwald, 1980；Greenwald, & Pratkanis, 1984）が "beneffectance" と名付けるところの，自分にとって都合のよい情報のほうが不都合な情報より思い出されやすい（Glixman, 1949; Rosenzweig, 1943）という記憶の"歪み"である。われわれは生きているかぎり次々とあらたな経験を積み重ねて行く。その中で，ある事については記憶に残し，ある意については忘れ去ってしまう。確かに，我々は自分に関することをよく覚えているのだが，自己知識は経験の忠実な貯蔵ではなく，豊富すぎる情報の中から取捨選択された結果でもある。

このように，self-reference 効果で取り上げられた効率性についての現象以外の現象をも視野にいれて，セルフと記憶の係わりを解明していこうとする時には，言語学習から生まれた比較的単純な記憶方略についての説明より，もうひとつ大きな枠組みを設定する必要があるのではあるまいか。良いモデルとは，より広範な事実や現象を説明しうるものでなければならない（森，1985）のであって，セルフと記憶の係わりを現象ごとに別々のメカニズムを想定するのは望ましい方向とは言えない。

Rogers,Kuiper,Kirker（1977）が処理水準の実験パラダイムを応用して self-reference 効果を発表して以来，self-reference 効果についの研究のほとんどが，彼らと同じように，方向付け課題にたいして2件法または3件法で解答させ，偶発記憶を検討するという実験パラダイムを用いている。記憶研究から借用した一つの実験パラダイムにあまりにも依存しすぎた（したがって，そこから得られた結果は "the self-referefence effect" と呼ぶべきものかもしれない）ことが，記憶促進技術的説明を生みだした原因のひとつとも考えられる。しかし，the self-reference effect についてはそのような純粋な記憶的要因の介在があり得ても，セルフにかかわる記憶保持はよいという，より普遍的な self-reference 現象をそれで説明できるとは限らないのである。

このような観点から，前述したself-reference効果のメカニズムをめぐる所説を再度検討するなら，先に紹介した処理水準，精緻化，体制化，感情，スキーマの五つの説明の中で最も妥当なのはスキーマ説プラス感情説であろう。セルフがスキーマであるなら，その内容に関連した情報が効率よく処理され，貯蔵される。その結果，自己知識はその領域でますます豊かになり，外界の豊かに符号化し，記憶内に保存することになる。しかし，自己知識の内容は positive なものに傾いている（Markus, 1980）といわれており，そこには感情要因が絡んでいることを認めざるを得ない。健康な人間は自己を有能なものと認知したい（Bandura, 1977, 1982）という心性を持っていると考えられ，事実自分にとって positive な意味を持つ情報にたいして YES という時，および negative な意味を持つ情報にたいして NO という時の判断が速い（Lewicki, 1984；遠藤，1987）。また，同じ自己知識に関連するものであっても，やはり自分にとってpositiveな意味を持つ情報のほうが negative な意味を持つ情報より保持がよい（遠藤，1987）ことも見い出されている。このような結果は，セルフに関する記憶の量的促進と内容的片寄りとをスキーマと感情説の枠組みから考えることの妥当性を示唆している。

この点についての具体的検討の数はまだ少なく，現在の段階ではあくまで一つの試論である。むしろ，感情という実証するのが困難なものを持ち出すことによって，議論を一層不透明なものにする危険性もある。しかし，セルフと記憶のかかわりの量的な側面と質的あるいは内容的側面とを双方視野に入れつつ，包括的に理解する方向で研究するためには，これから十分な検討を重ねる必要がある問題であろう。

結びにかえて

本稿では，セルフと記憶について，これまでにおこなわれたself-reference研究を紹介し，問題点を指摘した。そして，記憶の量的な検討とともに質的な検討の重要性を論じた。特に，問題解決や機械的言語学習とは異なって，自己に関する記憶は実生活の中でとる行動に影響し，その人のパーソナリティにも関連することを考えるなら，両側面の分離不能は明らかであろう。Self-reference 研究がセルフと記憶との係わりを問題にしながら，記憶研究の一つのヴァリエーションといった印象しか与えないのは，この点にたいして配慮を欠いていたせいかもしれない。越智(1984) のことばを借りるなら，「心理学がその出発点からこれまで長い間，あたりまえの，ありのままの事象を土台にすることを拒否し，いきなり，人間をもの的に対象化し，こま切れにして分析してきたことから，(研究) の不毛性を負わざるをえなかった」のである。近年よく言われる "ecological validity" とは，単に，社会的な刺激を用いるとか，現実に応用可能なものを目指すとかいう以上に，人間をこま切れにすることをやめて，人間の営みのの意味を全体的に捉らえることなのである。

とは言っても，切り刻まない丸ごとの人間を実証的研究の俎上にのせるのは，そう容易なことではなく，へたをするとたちまち混沌へと転落してしまいかねない。

近年，自伝的研究が徐々に増えて来ている。これは，今のところ，日誌をつけておいて，それらのできごとを一定期間後に再生し，個人の経験と記憶とを突き合せてみる (Linton, 1975, 1978; Wagenaar, 1986) といった素朴なアプローチをとっており，そのため膨大な時間が費やされねばならないが，自己知識の内容，質，量，およびそれぞれの関係を解明するひとつの試みとして注目される。特に，こうした研究の対象を幼児や児童の年齢までさげた場合には，これまでほとんど省みられなかった自己知識の形成過程，さらに，自己知識と自己概念，パーソナリティ，対人認知，行動などとのかかわりについてなんらかの示唆が得られるだろうと期待される。

(注) 日本語の「自己」には，様々な使い方があるが，認知システムという意味を持たせるのはまだ一般的ではない。そこで本稿では，認知システムとしての自己を表すのに，「セルフ」とカナ表記を用いた。

引用文献

Anderson, J. R., & Bower, G. H. 1973 *Human associative memory*. Washington, D. C.; Winston.

Baddeley, A. D. 1978 The trouble with levels: A reexamination of Craik and Lockhart's framework for memory research. *Psychological Review*, 85, 139-152.

Bandura, A. 1977 Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84, 191-215.

Bandura, A. 1982 The self and mechanisms of agency. In J. Suls (Ed.), *Psychological perspectives on the self* (Vol.1). Hillsdale, NJ: Erlbaum.

Bellezza, F.S. 1984 The self as a mnemonic device: The role of internal cues. *Journal of Personality and Social Psychology,* 47, 506-516.

Bellezza, F.S., Cheesman, F.L., & Reddy, B. G. 1977 Organization and semantic elaboration in free recall. *Journal of Experimental Psychology: Human Learning and Memory,* 3, 539-550.

Bower, G. H., & Gilligan, S. G. 1979 Remembering information related to one's self. *Journal of Research in Personality,* 13, 420-432.

Bower, G. H., Clark, M. C., Lesgold, A. M., & Winzenz, D. 1969 Hierarchical retrieval schemes in recall of categorized word lists. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior,* 8, 323-343.

Bower, G. H., & Karlin, M. B. 1974 Depth of processing of faces and recognition memory. *Journal of Experimental Psychology,* 4, 751-757.

Cantor, N., & Mischel, W. 1977 Traits as prototypes: Effects on recognition memory. *Journal of Personality and Social Psychology,* 35, 38-48.

Craik, F. I. M., & Lockhart, R. S. 1972 Levels of Processing: A framwork for memory research. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior,* 11, 671-684.

Craik, F. I. M., & Tulving, E. 1975 Depth of processing and the retention of words in episodic memory. *Journal of Experimental Psychology: General,* 104 (3), 268-294.

Ebbinghause, H. E. 1964 *Memory: A contribution to experimental psychology.* New York: Dover. (Originally Published, 1884).

遠藤由美 1985 理想自己における self-reference 効果 日本心理学会第49回大会発表論文集, p.713.

遠藤由美 1987 特性情報の処理における理想自己 心理学研究, 58, 5, 289-294.

Epstein, S. 1973 The self-concept revisited: Or a theory of a theory. *American Psychologist,* 28, 404-416.

Ferguson, T. J., Rule, G. R., & Carlson, D. 1983 Memory for personally relevant information. *Journal of Personality and Social Psychology,* 44, 251-261.

Freud, S. 1953 *The psychopathology of everyday life.* In J. Strachey (Ed.), *The standard edition of the Psychological works of Sigmund Freud* (Vol.4-5). London: Hogarth. (Originally published, 1900).

Freud, S. 1960 *The psychopathology of everyday life.* In J. Strachey (Ed.), *The standard edition of the psychological works of Sigmund Freud* (Vol.6). Lonon: Hogarth. (Originally published, 1901).

Friedman, A., & Pullybank, J. 1982 Remembering information about oneself and others: The role of distinctiveness. Paper presented at the meeting of the Psychonomic Society, Minneapolis, MN.

Ganellen, R. J., & Carver, C. S. 1985 Why does self-reference promote incidental encoding? *Journal of Experimental Social Psychology,* 21, 284-300.

Glixman, A. F. 1949 Recall of comleted and uncompleted activities under varying degrees of stress. *Jounal of Experimental Psychology,* 39, 291-296.

Greenwald, A. G. 1980 The totalitarian ego: Fabrication and revision of personal history. *American Psychologist,* 35, 603-318.

Greenwald, A. G., & Pratkanis, A. R. 1984 The self. In R. Wyer, & T. K. Srull (Eds.), *Handbook of Social Cognition,* (Vol. 3).

Halpin, J. A., Puff, C. R., Mason, H. F., & Martson, S. P. 1984 The self-reference and incidental recall by children. *Bulletin of the Psychonomic Society,* 22, 87-89.

Holmes, D. S. 1974 Investigations of repression: Differential recall of material experimentally or naturally associated with ego threat. *Psychological Bulletin,* 81, 632-653.

池上知子 1985 他者及び自己に関する記憶の構造 日本心理学会 第49回大会発表論文集, p.111.

Isen, A. M. 1984 Toward understanding the role of affect in cognition. In R. S. Wyer, Jr., & T. K. Srull (Eds.), *Handbook of social cognition* (Vol. 3). Hillsdale, NJ: Erlbaum.

加藤和生 1985 パーソメモリーにおける自己認識の役割 日本心理学会第49回大会発表論文集, p.173.

Katz, A. N. 1987 Self-reference in the encoding of creative-relevant traits. *Journal of Personality,* 55, 97-120.

川崎惠理子 1985 記憶におけるスキーマ理論 認知心理学講座 (Vol. 2) 記憶と知識 (小谷津孝明 編)

東大出版会.

Keenan, J. M., & Baillet, S. D. 1980 Memory for personally and socially significant events. In R. S. Nickerson (Ed.), *Attention and Performance* VIII. Hillsdale, NJ: Lawrence Erbaum Associates.

Kendzierski, D. 1980 Self-schemata and scripts : The recall of self-referent and scriptal information. *Personality and Social Psychology Bulletin,* 6, 23-29.

Kelly, G.A. 1955 *Psychology of personal constructs.* New York: Norton.

Kirker, W. S., and Rogers, T. B. 1978 Self-reference and affect. Unpublished manuscript, The University of Calgary.

Klein, S. B., & Kihlstrom, J. F. 1986 Elabortion, organization, and the self-reference effect in memory. *Journal of Experimental Psychology: General,* 115, 26-38.

Kuiper, N. A. 1981 Convergent evidence for the self as a prototype : The "inverted-U RT effect" for self and other judgments. *Personality and Social Psychology Bulletin,* 7, 438-443.

Kuiper, N. A., & Rogers, T. B. 1979 Encoding of personal information : Self-other differences. *Journal of Personality and Social Psychology,* 37,499-514.

Lewicki, P. 1984 self-schema and social information processing. *Journal of Personality and Social Psychology,* 47, 1177-1190.

Linton, M. 1975 Memory for real-world events. In D. A. Norman, & D. E. Rumelhart (Eds.), *Explorations in cognition.* San Francisco: Freeman.

Linton, M. 1978 Real world memory after six years: An in vivo study of very long term memory In M. M. Gruneberg, P. E. Morris, & R. N. Sykes (Eds.), *Practical aspects of memory.* New York: Academic Press.

Lord, C. G. 1980 Schemas and images as memory aids: Two modes of processing social information. *Journal of Personality and Social Psychology,* 38, 257-269.

Maki, R. H., & McCaul, K. D. 1985 The effects of self-reference versus other reference on the recall of traits and nouns. *Bulletion of the Psychonomic Society,* 23, 169-172.

Mandler, G. 1977 Commentary on "Organization and Memory." In G.Bower (Ed.), *Human memory: Basic processes.* New York : Academic Press.

Markus, H. 1977 Self-schemata and processing information about the self. *Journal of Personality and Social Psychology,* 35, 63-78.

Markus, H. 1980 The self in thought and memory. In D. M. Wegner, & R. R. Vallacher (Eds.), *The self in social psychology.* New York : Oxford Press.

Markus, H., Crane, M., Berstein, S., & Siladi, M. 1982 Self-schemas and gender. *Journal of Personality and Social Psychology,* 42, 38-50.

McCaul, K. D., & Maki, R. H. 1984 Self-reference versus desirability ratings and memory for traits. *Journal of Perso*nality and Social Psychology, 47, 953-955.

森敏昭 1985 記憶のモデル論 認知心理学講座 (Vol. 2) 記憶と知識 (小谷津孝明 編) 東京大学出版会

Neisser, U. 1978 Memory:what are the important questions ? In M. M. Gruneberg, P. E. Morris, & R. N. Sykes (Eds.), *Practical aspects of memory.* New York: Academic Press.

越智浩二郎 1984 人格と認知 認知心理学講座 (Vol. 1) 認知と心理学 (大山正・東 洋 編) 東京大学出版会

Posner, M. I, and Keele, S. W. 1968 On the genesis of abstract ideas. *Journal of Experimental Psychology,* 77, 353-363.

Rogers, T. B. 1974 An analysis of two central stages underlying responding to personality items: The self-referent decision and response selection. *Journal of Research in Personality,* 8, 128-138.

Rogers, T. B., Kuiper, N. A., & Kirker, W. S. 1977 Self-reference and the encoding of personal information. *Journal of Personality and Social Psychology,* 35, 677-688.

Rogers, T. B., Rogers, P. J., & Kuiper, N. A. 1979 Evidence for the self as a cognitive prototype: The "false alarms effect." *Personality and Social Psychology Bulletin,* 5, 53-56.

Rosenzweig, S. 1943 An experimental study of "repression" with special reference to need-persistence and ego-defensive reaction to frustration. *Journal of Experimetal Psychology,* 32, 64-74.

Sarbin, T. R. A. 1968 A preface to psychological analysis of the self. In C. Gordon, & K. J. Gergen (Eds), *The self in social interaction.* New York: Wiley.

Srulls, T. K. 1983 Organization and retrieval processes in person memory: An examination of processing objectives, presentation format, and the possible role of presentaion format, and the possible role of self-generated retrieval cues. *Journal of Personality and Social Psychology* 44, 1157-1170.

Srulls, T. K., Brand, J. F. 1983 Memory for information about persons: The effect of encoding operations on subsequent retrieval. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior,* 22, 219-230.

Strand, B. N., & Mueller, J. H. 1977 Levels of processing in Facial recognition memory. *Bulletin of the Psychonomic Society,* 9, 17-18.

高橋雅延 1983 記憶における精緻化過程の分析—処理情報の違いによる精緻化の効果の比較—. 京都大学教育学部修士論文

豊田弘司 1987 精緻化 (elaboration) 研究の展望 学習理論研究会発表資料

Wagenaar, W. A. 1986 My memory: A study of autobiographocal memory over six years. *Cognitive Psychology,* 18, 225-252.

吉川左紀子 1984 自我関与と特性形容詞の偶発記憶 関西心理学会第96回大会発表論文集, p.35.

(博士後期課程)